

# The Identity of a Christian University and the Possibility of Christian Studies as a Course in the Liberalarts

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 司郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24700">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24700</a>

# キリスト教大学のアイデンティティと キリスト教学の可能性

佐藤 司 郎

はじめに

キャンパス・ミニストリーとしてのキリスト教学

建学の精神とその展開

諸学との協働——または未来への共同責任

結び

はじめに

今回のテーマ全体を、掲げられた標題の後半の文言「キリスト教学の可能性」、それをさぐるという方向で私は理解しています。「キリスト教学」というのは私たちの大学でも一般の授業科目の一つですので、他の科目と共通した、たとえば内容の体系的な提示であるとか、大学の教室にふさわしい教授方法とかが当然あるわけですが、それだけでないことは言うまでもありません。そしてそれはまさに「キリスト教大学のアイデンティティ」との関係ということだと思います。他の教科目はキリスト教学ほどキリスト教大学のアイデンティティと直接の関係はありません。「キリスト教物理学」とかいうものがありうるのかどうか、ふつうには成立しないと思います。もちろんキリスト教学というのは神学とは異なり、一般の大学でも可能でしょうけれども、キリスト教大学においては別の形になるはずです。カトリック大学におけるキリスト教学とプロテスタント大学におけるキリスト教学、共通点が多いと思いますが、相違点もあるでしょう。そしてそれはおそらくカトリックとプロテスタントの大学のアイデンティティ理解の相違に帰着するのではないかと予想します。宮崎先生の発題と一緒に後で議論したいところです。いずれにせよキリスト教大学でキリスト教学をどのように理解し、どのように位

置づけ、そしてどのように行なったらよいのか、日頃考えていることを述べてみたいと思います。

### キャンパス・ミニストリーとしてのキリスト教学

はじめに「キリスト教学」の位置づけの問題です（今日はほとんどこの問題に終始するかも知れません）。これについては、いまして申し上げたように、一般にそう理解されているように私も、基本的には、キリスト教大学のアイデンティティとの関連で、換言すれば、キリスト教大学がキリスト教大学であるがゆえに存在している科目だと理解していますし、それでよいのではないかと思います。同じことを、別の観点でいえば、いわゆるキャンパス・ミニストリーの中に位置づけられるということです。その点では、キリスト教大学以外の、私立にせよ公立にせよ、そうした教育機関でのキリスト教の研究や教授とは違うものだと思っています。

ただこのミニストリーという言葉が私たちの大学では私から見れば少し狭く理解されているように思われます。ミニストリーにはいくつかの意味があります。資料としてお配りした拙論「教養教育科目としての『キリスト教学』の意味と課題」（本学教育研究所報告集、第9集、2009年3月）でも言及していますが、第一に聖職者、第二に聖職者の仕事・奉仕、あるいは教会全体の務めや奉仕、第三にそれらの奉仕の働きそのものを意味しています。キャンパス・ミニストリーとは簡単に言えばキャンパスにおける宣教全体のことで、教職と信徒の区別はここでは大きな意味をもちません。教会ではなく大学に遣わされているキリスト者たちの務めです。キリスト教学担当者だけでなく、キリスト者教員や職員すべての者によってなされるキリスト教活動そのもの、それがキャンパス・ミニストリーということになると思います。第二バチカン公会議では「信徒使徒性」が強調されましたが、カトリック教会ではこの辺のところはどうなるのでしょうか。後でご教示いただければ幸いです。私はいま校務分掌として図書館長を命じられていますが、これも、そのようなことはじつはあまり考えたことはないのですが、私においては大切なミニストリーの一部ということになります。いずれにせよ、大学の礼拝と「キリスト教学」をいわば車の両輪として、大学全体としてキャンパ

ス・ミニストリーは行われています。そして本学において「キリスト教学科」は、それらの働きの質を保証する重要な要の役割をこれまでも担ってきましたし、今日も担っています。

### 建学の精神とその展開

キリスト教学と礼拝を中核とするキャンパス・ミニストリーの展開と方向は、「キリスト教大学のアイデンティティ」との関わりにおいて、別言すれば、「建学の精神」との関係において、それを時代の中でどのように具体化していくかということとして理解しなければなりません。

今週の日曜日(6月1日)の新聞に、目にとめられた方も多いかと思いますが、私立大学のまとまった広告が出ていました。今日の発題のこともあり、めずらしくつい見入ってしまったことです。そこには「私立大学の原点——それは、建学の精神にあります」という大きな見出しのもとに45大学の建学の精神が出ており、あらためて興味深く眺めたいです。青山学院大学をはじめとして、日本女子大学や東海大学もふくめれば、キリスト教大学も8校出ています(東北学院大学は残念ながらありませんでした)。どういうことを建学の精神として掲げているか、参考のため、少し紹介しておきます。青山学院大学は「キリスト教信仰に基づく教育」が建学の精神。「地の塩、世の光」がモットーです。東京女子大学は「キリスト教を基盤としたリベラル・アーツ教育により個性を重んじ人材よりも人物を育成する教育」が建学の精神。「『ひとり』を育てるいくつもの知がある」というのが広告上のモットーです。明治学院大学は「キリスト教に基づく人格教育」が建学の精神。「ドゥ・フォ・アザーズ」がモットー。立教大学は「現象にとらわれずつねにその本質に迫ろうとする自由の精神」、そして「個性を重視した人間教育」、これが建学の精神。「キリスト教に基づく人間教育」というのが広告上のモットーです。関西学院大学は「マスターリー・フォ・サーヴィスを体現する世界市民を育成」というのがモットーです。同志社大学は「キリスト教主義・自由主義・国際主義」を教育理念とし、「建学の精神による良心に満たされた人物の養成」というのを建学の精神としてかけ、あまり聞き慣れない言葉ですが、「良心を手腕に運用する人物の養成」というのをモットーとして出しています。さてわが東北学院ですが、「福音主義キリスト

教の精神に基づく個人の尊厳と人格の完成」これが建学の精神です。そして「ライフ・ライト・アンド・ラブ・フォ・ザ・ワールド」、これが大学のモットーです。いま紹介したものはみな、いわゆる建学の精神を現代的に少しパラフレーズして示されたものですが、それほど変わらない歴史をもっている同じキリスト教大学でも個性が感じ取られ、たいへん興味深いものがあります。それと同時に、そこには、共通点のあることも、容易に指摘されることです。そしてそれをもし三つぐらいにまとめるとすれば、第一に、言うまでもなく「キリスト教に基づく」です。第二に、「人格教育・人間教育」。同志社大学の「良心に満たされた人物」の育成などは印象深いものがあります。そして第三に、いずれも、この世への奉仕というモメントが欠けていないということです。その点で、本学の建学の精神もモットーも、理念としてはまったく遜色のない、りっぱなものだと思います。じっさいこれはキリスト教的人間観とも関わり、日本において、何がキリスト教大学の固有の使命かというようなことを考える上でも、十分な土台となっていると思います。要は、それを今日の時代と社会の状況において個々の大学がそれらをいかに実現するか、そうした共同の熱意をいかに喚起し、保持しつづけるか、そのためにはどうでなければならないかということです。そのこととキリスト教学の意味や実践はどのように関わるかということです。

### 諸学との協働——または未来への共同責任

このことをもう少し考えてみます。キリスト教学の位置づけについては第一にミニストリーとして理解することをはじめに申し上げましたが、いまさしあたり確認した建学の精神、他者に奉仕する自由な個性豊かな人格の完成という、キリスト教大学の共通したモットーは、キリスト教を基として、しかもまさに普遍的価値へとつながるものを示しているのではないのでしょうか。キリスト教的価値観の真骨頂はこうした普遍性に存すると思います。フィリピ4・8のパウロの言葉にも通じるものがあります（「すべて信実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい」）。そこから、私たちは、キリスト教学を、他の諸科目との関連においてもとらえておかな

ければならないということが要請されます。これが、大学におけるキリスト教学の位置づけについての私の基本認識の第二です。諸学問とともに普遍的な価値の実現を目指すときにはじめてキリスト教学もその目標に達するということです。

この問題は、つきつめれば、神学と哲学、あるいは神学と理性というような問題に帰着するのだと思います。ここでその問題史をたどることはむろんできませんが、ごく簡単にまとめれば、神学と哲学を同一と考えるものと対立的に考えるのと、二つの方向があります。古代でいうとアレキサンドリアの教父たち、クレメンスやオリゲネスは一つとして考えていましたが、その対極にある、対立的に考えた弁証家は、古代で言えば言うまでもなくテルトゥリアヌスです。この線はルターにも見られますし、近代では哲学の側ではカント、フィヒテ。フィヒテがベルリン大学に神学部を置くことに反対したのは有名です。今日のファンダメンタリストたちは、そうなるでしょう。しかしキリスト教史全体を振り返ってみれば、おおかたは同一化でも対立でもない、区別しつつ関係づける道をとっててきました。古くはトマスが代表格でしょうが、二十世紀の弁証法神学者たちのうち、とくにブルンナーがそうだと思いますし、ティリヒを弁証法神学者に入れてよければ彼もそうです。バルトも、その初期はともかく、そこに位置づけられると私は判断していますが、ただ彼は神学を徹底して神の言葉の現実から構想し神学が哲学的原理から自由になるときのみに、またそのときはじめて哲学との積極的關係が可能になると考えています。この対立の契機はどのような立場にせよ維持されなければならないと思います。なおついでに申しますと、バルトは、最終講義の『福音主義神学入門』第一六講で、神学作業が教会外、この世においても意味をもつのではないかと述べ、まことにひかえめに次のように語っています。「人間のすべての意欲・行為・思念・知識の外に、それと並んで、また対立して、いわば神の業と言葉といったようなものが、そのすべてのものの限界・根拠・目的として、その動機、また鎮静剤として、問題とされるようになるかもしれない」とした上で、「昔はそこから大学そのものが生まれてきた神学部の存在さえ、今日においても、将来においても、意味深い現象でありえよう」と言っています。神学部は、他学部からは目障りな存在でしょうけれども、まさにそれ自身一つの問

いとして、意味ある存在でありつづけるというわけです。ボンヘッファーは「倫理」の、たとえば「究極的なものと究極以前のもの」という代表的な論考において「究極的なもの（＝義認）」との関係で「究極以前のもの」、あるいはプロテスタント神学の中で「不信の目で見られてきた」「自然的なもの」を位置づけています。そこには「服従」に見られる論理が反映していると見ていますが、いずれにしてもわれわれの問題を考える上でも参考になります。

さらにこの関連でモルトマンの立場は、私はたいへん示唆的だと思っています。たとえば「近代の諸学問の世界における神学」（「神学の展望」）などで論じられていることは「キリスト教学」がキリスト教大学で現に果たしている、また果たすべきことについて考える重要な手がかりとなるように思います。拙稿にすでに書きましたので、かいつまんで申し上げますとこうなります。

モルトマンがそこでしようとしたことは、今日の神学の新しい展望を開くことです。そのために彼は、信仰と理性として「複線化」する近代精神の中であがわれた「人間の内面性」に安住する神学を自己批判し、神学が本来もっている全体関心、世界責任をあらためて呼びさまそうとしています。こうした新しい神学概念の構想はイエス・キリストの十字架と復活の理解から与えられます。モルトマンによれば、十字架と復活は「歴史の終わり」の先取りの開示にほかなりません。それは、つまり歴史の終局的な危機と到来する神の国の世界変革を示しています。キリストの出来事によって神学が見て取るのは裁きと救いの危機に直面している世界と人間の姿です。「キリスト教神学はもうこれ以上、諸学問を向こうにまわし一つの前線に固執しそこにとどまっていることはできない。むしろ世界の救いが望まれ、滅びが恐れられるがゆえに、未来が勝ち得られるか、それとも虚しく終わるかがそこでこそ決定される私たちが現在と名づけるあの前線に諸学問といっしょに赴く」。これがモルトマンの思い描くキリスト教神学の姿です。したがってこの神学は、諸学問と「共に旅する」のです。未来への責任において神学と同じ課題をになっている諸学問と対話しつつ歩んで行きます。その際神学は諸学問に問いを提出することもやめません。先ほどバルトの最終講義の文言を紹介しましたが、彼もそこで諸学問に対する問いとしての神学作業ということ

を言っていました（むろんバルトにおいては結果的に問いとなるというようにきわめて控えめに言っていますけれども）。それ自身に善の基準をもたない部分知・条件知として学問的〔科学的〕認識が歴史の全体に対してどのような責任を果たすのか、いかなる意味をもつのか、歴史の終わり、神の国の到来を知る神学は問わないわけにはいかないのです。しかしその場合、反対に、キリスト教神学も、共に歩む諸学問からの批判的問いを受けることを覚悟しなければならない。キリスト教信仰と神学がまさにその想起と待望とによって生きている神の国に今ここでふさわしく歩んでいるかと。キリスト教が本来の世界関心・世界責任を放棄し、一つのイデオロギーと化し、閉鎖的な態度で自己利害に終始してはいないかと。そうした諸学からの問いに神学はつねにさらされています。「神学はあらゆる学問のあらゆる分野にあって責任に対する感覚と将来を見通す能力を研ぎ澄まさなければならない。何となれば神学の時は、パウロとともに「夜は更け、日が近づいている」（ローマ 13, 12）と語ることだから。終末論的信仰はただ諸学問と共にのみ歴史の今が何時かを自覚することができるのである」。キリスト教大学の建学の精神、そこにうたわれた普遍的人間像を指摘しましたが、そうした目標はキリスト教だけで達成されるものではない、そうではなくて、まさに諸学と共にしか実現しえないものです。拙論では「未来への共同責任」という言葉を使いましたが、われわれが「地の塩」「世の光」であるために、地に対する、世に対する、時代に対する、そこに生きる人間に対するわれわれの神から求められている責任を果たす、そうしたことをキリスト教はしっかり考えなければならないと思います。それをどのようにキリスト教の運営に生かしていくのか、むろんそれはもう一つの課題ですが、いずれにせよ現代のキリスト教の可能性は、諸学と対話し協働し、未来に対する責任をになうという方面にも求められなければならないと考えます。（キリスト教を今日どのように行うのか、ということについては、今日は申し上げることはできません。書いたものを御覧下さればと思います。そこに書いたことは、これも簡単に言えば、プロテスタントのキリスト教は、聖書を説くということが中心になるということ、その上で私は大内三郎先生の植村正久論からヒントを得て、それを少し加工して、一つはキリスト教の弁証、つまりキリスト教に対する偏見・誤解を



解き、あるいは無知に対し知識を与えること、もう一つは、倫理的なアプローチの必要性・有効性、そして最後に、本来のキリスト教の内容のしっかりした提示ということ、われわれのキリスト教のなすべきこととして記しておきました。あとでの討論のきっかけとなれば幸いです)。

## 結び

最後にキリスト教大学の使命というようなことについて申し上げたいと思います。本来最後にちょっと触れるというような取り扱いをすべき問題ではありませんが、正面切って提示する立場にもありませんので、おゆるし願いたいと思います。

一つはキリスト教主義であれ何であれ、私学も、いやくも大学であるかぎり、その水準と実質を確保し公共的責任をきちんと果たさなければならぬ、言うまでもないことですが、そのことが第一のことです。

しかしキリスト教大学がそれだけでよいというわけにいかないことは言うまでもありません。第一に、伝道の使命をもっていると思います。教会ではありませんので、直接の伝道は行われぬ。ここでは洗礼も聖餐も行われぬ。たしかに教会ではない。しかし、東北学院がそうであるように、本来伝道を目的として設立されたことは明らかです。教育に重心があるとはいえ、キリスト者がここに遣わされているということ、それゆえになされるべきことは少なくないと思います。教会学校が軒並み振るわないことは現実です。私自身の経験から言えば、90年代の中頃からそれは顕著になってきました。廃止や休校にしてしまうところも多く出ています。日曜学校に通った私など残念です。地域に対する、この世に対する責任・関わりは福音の本質から要請されていることです。何とかならないかというのが率直の願いです。そうなると、むろん教会学校の代わりになることはないとしても、小中高から大学までも含めて、若い人たちにキリストを伝えるためのキリスト教学校の役割は相対的に大きなものとなっています。どのようにすればよいのか分かりませんが、キリスト教学校で青年・学生伝道の使命をまずもって自覚し直すことから出発したいものです。

第二にリベラル・アーツ・カレッジとしてその実質を追求したいという

ことです。教養教育です。近代産業社会の中で技術教育重視の中で教養教育は一般に軽視される傾向にありましたし、日本においては教養教育というと、たとえば戦前の教養というのは天皇制絶対主義の中での教養であり、必ずしも普遍的価値に開かれていくようなものでなかったことも否めないでしょう。そうした中、普遍的価値に開かれたリベラル・アーツ・エデュケーションを日本で担ったのはキリスト教大学でした。一方で学問を追求するとともに他方でその学問の世界と人生に対する意味を問いつつ普遍的価値に開かれた人間の形成・人格の形成を目指す教養教育の新たな構築です。

第三に私学としてのキリスト教大学のもつ貴重な自由を放棄してはならないということです。二十世紀の著名な政治学者 A・D・リンゼイは、民主主義は自由な共同社会（たとえば、教会や大学）を必要とし、その「彩り豊かな生活を保護すること」に国家の本務を見えています（『民主主義の本質』）。この自由で自発的な教育共同体の形成それ自体がこの日本にあってもっとも勝れたキリスト教学校の貢献です。それが私たちの課題です。そのためにはキリストの主権のもとでのわれわれ自身の自由で民主的な共同の自己形成は不可欠です。それが本当に追求されなければ、大学がどன்றりっぱな業績をあげたと見えたとしても、キリスト教大学としては本来の使命に忠実だと言うことはできないでしょう。その点でキリスト教大学も、教会と同じく、神の国に対応した、神の国にふさわしい在り方をもって、その使命を果たしたいものです。

(2009年6月5日)